

ニュースレター第45号をお届けいたします。今号は樋野先生とスタッフの山崎が担当します。

『協調・協力こそが力なり』 ～ 立場を超えて集う『交流の場』～

樋野興夫（順天堂大学名誉教授、新渡戸稲造記念センター長）



2026年9月12日 2012年からスタートされた第152回『お茶の水メディカル・カフェ in OCC（お茶の水クリスチャン・センター）』に赴いた。個人面談の機会も与えられた。大変有意義な充実した貴重な時となった。

『お茶の水メディカル・カフェ』は、2011年3月11日 東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）が発生し、当時 OCC 副理事長であった榊原寛(1941-2020)先生が、2012年に【お茶の水メディカル・カフェ】を始められた。筆者は、『順天堂大学医学部 病理・腫瘍学教授』時代の2012年5月26日に 第1回『お茶の水メディカル・カフェ』に出席したものである。1933年3月3日に 三陸で地震の大災害があった。新渡戸稲造(1862-1933)は 被災地 宮古市等沿岸部を 視察したとのことである。その惨状を目の当たりにした 新渡戸稲造は『Union is Power』（協調・協力こそが力なり）と当時の青年に語ったと言われている。

2024年には、12周年記念で『OCCカフェ 12周年記念誌』が製本された。【OCCメディカル・カフェ ニュースレター『賢明な寛容: the wise patience』】は毎月発行されている。最新の第44号(2026年8月号)が、今回、会場に置かれていた。筆者は、『ユーモア (You more) ～ 小さなことに 大きな愛を込める ～』の文章を寄稿した。来年(2027年)には、『OCCカフェ 15周年記念誌』が、制作されるようである。スタッフの皆様の【速効性と英断】の姿勢には、ただただ感服する。【『訪れる人を温かく迎い入れる＝喜んで大きな愛を込める』で、あらゆる人々が立場を超えて集う『交流の場』】の『お茶の水 (OCC) メディカル・カフェの存在意義と継続の大切さ』を実感する日々である。

～私が見ているカフェの景色～

今回はお茶の水がん哲学外来・メディカルカフェ in OCCで司会をさせていただいている山崎が見ている、メディカルカフェの景色についてご紹介したいと思います。私は2009年に当時教員をしていた大学院の「がんの病理学」の講義を榎野先生にお願いしたご縁がきっかけで、2012年5月の第1回目よりスタッフとして参加し、当時はグループのファシリテーターを担っておりました。今のように日本全国にカフェが開設される前で横浜、東久留米に続いて3つ目のカフェということで、たくさんの方がおいでくださり、いつしか参加者は80人から100人程となりました。各テーブルの周りに8人程の方が座りますが、会場はみっちりで両隣のテーブルから前や後ろからも重ねて声が聞こえるので、みんなで耳を寄せながら必死にお話を聞きました。なかなか今のようにゆったりとお話をして、聞くということが難しく、私自身もファシリテーターをしながら皆さんが満足して帰れているのだろうかという不安な気持ちになることもしばしばありました。しかしカフェの代表であり司会をされていた榎原先生はそのような大人数でも、隅々まで目配りをされて、心配な方に声をかけたり、得意のユーモアで場をなごませたりとされていました。

コロナ禍で休止中の2020年クリスマスイブに榎原先生が天に召され、2021年の夏にとにかく早く対面カフェを再開しなくてはならないという榎野先生の号令の下で、再開準備を始め、私は司会とニュースレター作成を担当することになりました。お申し込みのメールにお応えして、当日の面談をスケジュールしご案内しますが、合間でカフェタイムの皆さんのご様子を拝見しています。

最初は初めての場やメンバーで緊張感が漂っていますが、段々と打ち解けて声のトーンが上がって、終わり10分前には弾ける様な笑い声が聞こえるようになり、終わりを告げる一言にいつも少し躊躇します。毎回、素敵な化学反応を目の前で見るという醍醐味を経験しています。かつて榎原先生はこれよりもっと大きな景色を見ていたのだなと思いながら、今日もカフェを開けて良かったと、未熟なファシリテーターをしていたあの頃とは違う安堵感をもって会を終えることができます。これもスタッフと参加者の皆さまの織りなすハーモニーのお陰です。



これからも空っぽの器を準備して、スタッフ一同で皆様との対話の時間を心待ちにしております。

お茶の水がん哲学外来・メディカル・カフェ in OCC スタッフ 山崎 智子